
異世界からの勇者サマ？

nakumoto

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界からの勇者サマ？

【Nコード】

N8534Z

【作者名】

nakumoto

【あらすじ】

魔王を倒したはずなのに魔王の畏によって幻想世界から現実世界に飛ばされてしまった主人公。魔王もなにもいない平和(?)なこの世界で主人公はどう活躍するのか!?

異世界召喚物の逆召喚系ストーリー

チートありの主人公最強系です。

プロローグ

ついに魔王ベルガロスを倒した！

長い死闘の末、沸きあがるのは疲労よりも勝利の喜びだろう。

後ろから仲間たちが歓声を上げながらこっちに向かってくる。

先頭はナギ族のリンだ。その後ろにエルフ族のマルガース、人間族のカルス、獣人族のジンも続いてやってくる。

「やったな！お前なら勝てると思ってた！」

リンが目には涙を浮かべ抱きついてきた。

「そ、そうか？結構きつかったんだけどなあ」

リンの黒くて長い髪をなでながら自信なさそうに俺は答えた。

「お前がダメならこの世界はとうに滅んでいただろうよ……。」
ジンがため息をつきながらつぶやく。

「でも、ほんとにすごいよ！」

カルスが目をキラキラさせながらこっちを見つめてくる。

「ふ、さすがは私の見込んだ男だ」

マルカースがさも当然のような感じでうなづく。

「みんな、今までありがとう。でも、これで終わってないんだよ」

「「え？」」

「ど、どういっしょ……？」

「さっき倒したアレは分身、つまり思念体みたいなもんだよ」

「なっ……！」

「なにを……いつて……」

みんながだいぶ戸惑っているようだ。それも当然だろう、膨大な魔力と戦闘力を秘めたあれが分身だと言い切ったからだ。

「本体は他にあるのさ、こっちだよ」

そう言うと俺は城の地下へと歩き出す。

みんなは慌てて付いて行く。

「……ここだ」

祭壇のような物が地下にあった。それは巨大で床には魔方陣のようなものがある。

祭壇の中央に心臓のようなものが脈打って動いている。

「よく気づいたな……」

天井から響くような声が聞こえてくる

「分身を倒したとき魔力が逃げて行くのが見えたからな」

「ほう、魔力を見るとはさすがは勇者様だ」

「そんな大したものじゃないさ、俺はな」

仲間たちは口をあけてぽかーんとしながら俺と魔王本体との話を聞

いている。

おいおい、お前ら大丈夫かよ。

俺は腰から剣を抜くと心臓に向けて振り下ろした。

「だが、これで終わりだ・・・！」

心臓に刃が届きそうになったその瞬間、俺は光に包まれた。

な、なんだ・・・？

「はははは、畏にかかったな！俺に害をなすものは消え去るのみ！
はーはははー！」

魔王の笑いが聞こえてくる

光で心臓の位置がわからないが元あった位置をなんとなく推測でナイフを投げた

「ぎゃあああああああ」

魔王の悲鳴と共に俺の意識は消えていった・・・。

彷徨う勇者（前書き）

勇者は主人公ですが、現時点で名前は決まっておりません。

(なんだ、ここは・・・?)

空高くそびえるそれは柱のようだ。

(建物か?)

赤青緑といった光が輝いている

魔法か?と思つたが魔力を感じない。

大きな窓ようなところには女性がこちらを向けてしゃべっているが言葉はさっぱりわからん。

とりあえず、移動しよう。ここは騒がしすぎる、もっと静かなところに行くか。

そう、思うと裏路地のようなほうにと歩いていった。

静かになつたと思つたら今度は悲鳴のようなものが聞こえた。

「おいおい、今度は何だ?」

近づいてみると女が男二人に襲われているらしい。

一人がかばんを物色し、もう一人は女を推さえつけている

「あー、お前らその人を放しな」

とりあえず話しかけてみるが、男がナイフをこちらに向けて追いつよな手振りをした。

「わたし、言葉わかりませーん」

そう言うと、俺はナイフを持っている男を思いっきり地面に叩きつけた。

「!?!?」

悲鳴が聞こえたが気にしない。

もう一人がこっちに気づいたが同じように地面に叩きつける。

女のほうは一瞬のできごとで驚いたが、すぐにバックを掴むと一目散に逃げ出した。

「お礼はなしか・・・」

とりあえず、どうするかな・・・。

(こいつらは盗賊だよな?ということは、つまり悪だ。悪人には制裁を!)

勇者の悪い癖が始まった、悪人には一切の容赦はしない、たとえそれが自分に向けられた悪意でも、だ。

男二人の頭を片手ずつで掴み、それを行使した。

(まずは、言葉とこの世界の常識や通貨、その他諸々の情報をもらおうぞ!)

電気のようなものが両手から出ている。

男たちは電流が流されているがごとくからだが痙攣を起こしている。

『強制情報収集魔法』

本来、敵のアジトの場所を探り出したりするのが目的のこの魔法。脳細胞に直接電気を流し込んで相手の記憶を探るといふ荒業なのが、人の情報量は膨大だ。

そのためもう一人の脳を媒体とし、そこで情報を統合、いろいろな情報を整理し、必要な情報だけをもらう。

わずか1分ほどでそれは終わった。

両手から頭が離れるとともに男は地面に崩れ落ちた。全身から煙のようなものが出て、肉が焼けるような臭いがする。目、耳、口、鼻から血がでている。

確実に死んでいるだろうが、勇者はそんなことは気にしなかった。むしろ、もらった情報を整理するのに必死だったからだ。

（特にこれといって大した情報じゃないな、わかったのは通貨、車の運転、あとは・・・銃のことくらいか）

少ない、まあ、でも言葉がわかっただけでよしとするか。

焼き焦げた死体からサイフを抜き取りそのまま立ち去る。

とりあえず、世界地図とあとはその他の知識だ。図書館とかあるかな？

目的も決まったがこの時点で元の世界に帰ることは考えていない勇者であった・・・。

数時間後、図書館であらかたの情報を収集したがこの世界は非常に

面白い！

まず、魔法が一切存在しない。どうやら化石燃料のみで発達した世界のようだ。

このインターネットとかいう物もいいし、この星の性質等様々なことがよくわかる。

これは、いい魔法が作れそうだ、ふふふ。

あとは、金が必要だな。いかんせん、さっきチンピラからもらった金ではこの世界で生活することすらできない。冒険者ギルドもないし、なにより素性が知れない人間を雇うなんてできるのだから・・・？

ブツブツと考え込みながら道路を渡ったその瞬間、もうスピードで突っ込んできた車に轢かれた。

出会いと勇者と（前書き）

やっと主人公の名前がでてきます

出会いと勇者と

ドン!

急に衝撃と音がした。

轢かれた人は宙を舞い、道路に着地した。

「殺気がない無機物な物は厄介だな……。」

怪我一つなく眩く。

そして、自分を轢いてそのまま走り去る車を見て、跳んだ。

車の屋根伝いを跳びながら目標の車に近づき、屋根に飛びついた。

「逃がさん!」

そのまま、素手でフロントガラスを突き破りドライバーを引きずり出す。

「カツハッ!」

ドライバーの男の顔は驚きの顔で満ちている。

勇者は首を掴み絞めながら、説教を始めた。

「無抵抗の人を轢いておいて、あやまらずに逃げるとはいい度胸だな、え?」

男の顔が青白くなっていくが、気にしない。

「いいか?今度から運転するときは……。うん?」

パン！

銃声がした。振り向くと黒服でメガネをかけた女が銃を向けて立っている。

「その男を放しなさい！」

「なぜだ？」

「いいですか？その男は大事な証人なのです！その男が死ぬとこの国が終わるのですよ！」

「は？いや、よくわからんがどういうことだ？詳しく話せ」
そう言いつつも手は放さない。

「え、えーと……。話すと長くなるのですがよろしいですか？」

「大丈夫だ、時間はたくさんある。ただし、簡潔にな。」

「つ、つまり、とあるテログループが核爆弾をこの国の都市のどこかに設置し、政府に対し要求をしてきたのです。私たちは爆破の阻止と犯人グループの逮捕を目的としているテロ対策捜査班です。そして、その男は核をどこかに運んだと思われる犯人の一人なのです。」

「ふむ、ぶつちやけるとその爆破とやらを阻止すれば金はもらえるかね？」

「えっ？お、お金ですか……。？一応出ると思いますけど……。」

「では、契約しよう」

「はぁ……。では、その男を……。」

「尋問か？ 必要ない。」

「えっ？」

ピリッ！

手から電気のようなものが出ると同時に手を放す。
男は失神しているようだ。

「今、何を……？」

「こいつから情報を取った。行き先は港の倉庫だ。行くぞ」

「ど、どうやって……？ ってなんでそんなことがわかるんですか
！？」

「いいから、行くぞ。早く車を出せ。」

ちやつかりと助手席に座る。

「……わかりました！ あ、自分はベル・コーランドと言います。
よろしく願いますね。」

「俺の名前は、レオン・ジングロードだ。よろしくな。」

自己紹介を簡単に済ませて、車は港に向かう。

「しかし、見ず知らずの人間の言うことをあっさり聞くとは、さては貴様単純な性格の持ち主か？」

「あの、ちよつと・・・、いきなり面と向かってそのような暴言を吐かれるとさすがに怒りますよ？」

すごい目つきで睨んでくる。どうやらお怒りの様子。

「ふむ、単純で怒りやすい性質とはまた厄介な・・・」

「いい加減にしないと車から追い出しますよ？」

おお、怖い怖い。

「で、ぶつちやけなぜ信じた？」

「一応質問でもして話題変更だ。」

「話題を変えましたね・・・。いいでしょう、お答えします。アレを見たら誰だつてこの人はヒーローだと思いますよ。自分を轢いた人間を走つて（正確には跳んで）追いかけて悪人をぶつつぶす。かつこいいじゃないですか！」

「・・・。」

どこの誰だよ、こんなやつを政府機関に採用した馬鹿は。

「ヒーローねえ・・・。」

「はい！それに超能力者は他にも見たことがありますから大丈夫ですよー！」

「超能力？」

「ええ、レオンさんは恐らく身体強化と心を読む力を持っているんですよ？」

「いや、・・・(まあいいか)。あー、うんそんな感じだ」

実際には超能力ではなく魔法による身体強化だがあえて黙っていることにする。

「能力者のエージェントは機関にもいますから、大丈夫ですよ」

「へえ、今度会ってみたいものだな。ところで、応援とかを呼ばなくていいのか？」

「え？応援・・・？」

「ああ、敵の拠点にこれから乗り込むのだろう？二人ではさすがにきついと思うぞ？」

「あつ！そういえば伝えてませんでした。ちょっとこれから連絡しますね。」

そういつてなにやら通信機を取り出して位置と場所を伝える。

「現地で合流します。飛ばしますよー！」
そういつと車は加速していった。

倉庫の手前に車は停まった。

周囲には黒いワゴン車が4、5台停まっております。黒いボディアーマーを着てサブマシンガンを持っている隊員達がいた。そのなかでもこつ体格をし頬に大きな傷がある男が前に出る。

「よく、この場所がわかったな。そいつがESPか？」

「ええ、そのとおりよ。二つも能力を持っているの」

まるで自分のもののように自慢げにベルが話す。

「二つねえ、そいつはすごいな。突入部隊を指揮する、ガルドだ。よろしくな」

「レオンだ、すぐに突入するのか？」

握手をしながらも状況を確認していく。

「ああ、一刻を争う状況だしな。」

「中の様子を確認しなくていいのか？」

「そうですね！何かあるかわからないうちは危険です！」

「うーむ、しかし確認するべきがない」

「だったら、レオンさんに確認してもらいましょう！」

「え？」

「このタイプの倉庫には天井に窓が付いているはずですよ。レオンさんに屋根に上っていただいて中の様子を報告するというのはどうでしょうか？」

「なるほど、いい考えだ。行ってもらえるかな？」

「ああ、構わない。」

急に話を振られてちょっと驚いたがとりあえず返事だけしとく。できれば実戦を試していきたくはあったのだがこれはいい機会だな。

「よし、じゃあこの通信機を持って行け。中の様子を確認したらその場で待機だ。いいな？」

「いや、俺も一応参加したいんだが・・・。」

「だめだ、実戦経験のないやつには今回は引いてもらう。それにまだどういった能力が知らんしな。」

望みが絶たれた。

数分後、レオンは倉庫の屋根にいた。倉庫内には10人ほどの男がそれぞれ銃を持ってなにかの装置を作っている。あの装置が核とやらなんだろう。人数と装備、それから装置の位置をガルドに伝え、人数が多いから自分も参戦しようかと聞いたがやはりダメだった。

ドン！

扉が爆発し、ベルを含む部隊が突入した。それと同時に始まる銃撃戦。すぐに終わると思っていた銃撃戦は意外なほどに長期戦へと

つれ込んだ。

なぜそうなったかには、原因がいくつかある。まず、一つ目に倉庫の外にあるセンサーの一つに反応があったこと。これは侵入者を知らせるための装置であり、それに気づかず突入隊が引つかかってしまったことだ。二つ目に脱出を考えている暇はないと感じた敵指揮官はここで核を爆発させようと判断した。例え街中でなくても、核が爆発してしまえばその後政府への影響に響くと思ったからである。かくして、テロリスト達は防衛陣形を敷き時間を稼ぐことで核を爆発させようとしているのであった。

特務機関クレイモアセブン

屋根の上って中の様子を眺めていたレオンは一瞬で敵の狙いを見抜いてしまった。入り口付近で苦戦しているガルドに向かって通信で核装置を先に伝えようと思ったがそれより先にベルが動いた。彼と同時にやはり彼女も敵の狙いに気づいたのである。

（単純なのか鋭いかわからんな・・・。）

非常に失礼な感想を思いつつもその行動を観察する。

装置まで一気に走り無事装置を確保したが逆に敵に取り囲まれてしまっ。

味方のピンチと知りながらも動けないガルド。

（これは助けに行かなくてはならないな。）

そう思い窓を突き破り内部に侵入した。

ガシャーン

天窓から何者かが降りてきた。

テロリスト達は敵の増援かと思いつさに銃をむける。

突入部隊は予想外のことに一瞬目を奪われる。

床になんなく着地したレオンは飛び舞う銃弾の雨の中をまるで散歩するかのごとく歩く。

テロリストの一人が銃を向け発砲した。

ダアン！

まっすぐに銃弾はレオン向かい、そして、手前でいきなり斜めになったかと思うと右に逸れ地面に落ちていった。

驚いて目をむくテロリスト。銃弾を目で追ったわけではない。確実に当たると信じていたものが何も起きなかったからだ。サブマシンガンを連射して今度は外さないといったように撃つがまたすべて逸れてしまう。弾の軌道に気づいたものは誰もいなかったがこの不思議な光景に誰も驚いていた。

ベルはその光景を見て、まさか、三つ目の能力があるなんて！と思っていたがそれは一瞬だけだった。

銃を撃ったテロリストは今度こそはと思い銃を構えたがすでに敵の姿は見えず代わりに後ろからの衝撃で意識を失った。

レオンは降り注ぐ弾丸の中相手の背後を一瞬で取り一撃で相手を昏倒させていく。

（意外にこの世界でもこの魔法は効くものだな。改良しておいて正解だった）

そう思いながら敵を沈めていく。

『自己領域干渉障壁魔法』

この世界の科学に触れ重力というものを追加してより強力になったこの魔法はバリアに近いものがある。元々敵軍の矢雨の中を単独で突っ込む時に考え出された。自分に高速で向かってくる飛来物に対して働く魔法であり、飛来物は自分には当らず地面に激突するといふもの。最初は軌道をそらすことだけの魔法だったが重力を追加することで地面に当るようにすることができた。これにより味方への誤射が減ったというわけである。

一人、また一人とテロリスト達は倒れていきレオンが現れて数分も

経たないうちに倉庫内は制圧されてしまった。

「すごいですねー、レオンさんはやっぱりヒーローですよー」
目をキラキラしながらこっちを見つめてくるベル。

「あんな能力を持っているとは驚いたよ」
素直に驚いているガルドとウンウンと他の隊員たちもうなづく。

「じゃあ帰りますかー、レオンさんも付いてきてくださいね」

お、やっと報酬がもらえるなと思いながら素直に付いていくレオン。
1時間後、レオンは白いコンクリートの建物の中にいた。

「ここが政府直属特務機関クレイモアセブんです。」

「へえー、もつとごついイメージだったんだがなあ。」
あえて名前には突っ込まない。

「レオンさんにはまず適正審査を受けてもらいます。」

「審査？俺は報酬をもらいたいだけなんだが・・・」

「ええ、でも審査をしないと、エージェントにはなれませんし・・・」
「」

「はあ？えーじえんと・・・？」

「はい、超能力を持っている以上野放しにはできませんし。いつそ
エージェントにもなれば職にも就けて一石二鳥ですよ！」

グツとこぶしを握り親指を立てて言うてくる。

「組織に入るとは言うてないし聞いてないぞ。」

「えー、だめですよ。超能力を持っている以上政府は監視下に置かないといけない取り組みになっているんですからー。それに、お金が欲しいのでしたら働けばいいですし、問題ないですってばー。」

この娘、アホの子に見えて実は策士か。

まあ、いい。ギルドみたいなもんだらう。適当に入ってあとは勝手にさせてもらおう。

そのん気に考えると二つ返事でOKしてしまった。

「で、審査というのは？」

「審査と言うのはですねー、レオンさんがどんな能力を持っているのかを診断してもらおうですよー」

「そいつはまた、便利だな・・・。」

（ちようどいい、この世界で魔法がどのように見えるのかいい機会だ）

「いいです」

足を止めるとそこは庭だった。

花や木々に囲まれた中央に池のようなものがあり真ん中に目をつむった女性が一人座っている。

（盲目か？）

まるでこの庭の主のように……。

「連れて来ました、彼です。」

「ありがとう、ベル。」
女性が答える。

「私の名は……いえ、不要でしょう。紹介はなしにしましょう。
お互いに」

ベルは静かに部屋をあとにした。

不思議がってふとベルのあとを目で追っていたが、話しかけられて
いると気づき視線を戻す。

「ここは監視されており、音声もこちらに届いております。ですか
ら、この場に誰か残す必要はないんですよ。」

俺の疑念に答える。

「とつと始めてくれ、こつこつ空気は苦手なんだ。」

「ではこちらに」

手を差し伸べられ、座るように促される。

女性の正面に座り、わずかに緊張しながらただ待つ。

「この人の能力は……」

あっけないな、光とかに包まれるかと思っただぜ。

「能力は・・・ありません。この人はただの一般人です。超能力の存在が確認できません。」

機関と機関と

「超能力はありません。」

別室で審査の内容を聞いていたベルはこの言葉に硬直した。

「超能力がない？そんな馬鹿な！じゃああれは一体なんだったの！」
今までレオンが見せてきた超能力とおぼしき現象の数々。それらがすべて超能力ではないということになる。しかも、それらは我々にすら感知できるものではないということだ。では、あれらは一体なんだったというのだ。という疑問にあたるが、それを解決するすべはなかった。

ガーデンといわれるその審査室でレオンは自分の能力のなさを聞いていたが、意外なほどに冷静だった。

（超能力というカテゴリには俺は当てはまらないというわけか）
特に驚きもなく、ましてや期待していたのでもなく、立ち上がる。特に言葉もない。黙って立ち上がり黙って部屋を出て行く。

隣からベルが駆けつけてきた。

「どういうこと！？あなたの能力ってなんなの？」

疑問をいきなりぶつけてくるがそれに答える義理もないため、無視して本題に移る。

「そんなことより、報酬の件だが・・・」

「報酬！報酬！ってあなた、エージェントにはなれないのよ？わか

「っているの!？」

「超能力エージェントには、だろ?一般エージェントでもかまわんし、なれないならもらうものもらってさっさとここを出て行くよ。」

「何を言ってるの?いい?超能力があればその人は監視対象なの!だから外では自由に動けないのよ!」

「でも、俺には超能力ないんだろ?じゃあいいじゃないか、別になにしたって問題ないだろう?妙に突っかかるがなにかあるのか?」

ちよつと反抗した態度を取ってみるとすぐにベルはひるんだ。なにかをしゃべろうと口を開けた時、静止の声が聞こえた。

「そこまでだ、二人とも!局長がお呼びだ。付いて来い」

黒スーツに黒いサングラスの男が割って入って来た。

俺とベルの口論はすぐに収まり、黒スーツの男に黙って付いていく。

案内された部屋はいかにもっていつほどの部屋だった。

椅子にどっしりと座って構えているのは黒人のおっさん。

「君がレオン君か、私はクレイモアセブンの局長、ジェームズだ。よろしくな。さて、いきなりだが本題に入ろうか。君は超能力がないと診断されたらしいな、だが報告では超能力とおぼしき能力でテロリスト共を殲滅している。そこで私は思ったのだよ。君は我々の関知しえない能力を持っていると考えているのだがどうだね?」

いきなり、何を言い出すのかと思えばずいぶんと直球できたもんだ。

「まあ、そんなところですよ。とはいえ、あなたがたが関知できないのですから超能力といったカテゴリーに俺は入らないですよね？」

「ふむ、そのとおりでもあるな。無登録の超能力者には監視が付くことになっているが超能力が発見できないのであればしかたがないな。」

「では、今回の事件解決への協力報酬をいただけませんかねえ？」

「いいだろう。なにがいい？金か？」

「金はいりません、この国で生活できる身分証明の類が欲しいんですよ。」

ジエームズは一瞬目を見開いた。まずったかな？

「なに？君はIDを持っていないのかね？」

ID？よくわからん

「ええと、（異世界から召喚されましたとは言えんし……。）実は記憶喪失でして名前以外にはなにも……。所持品もなくわからないですよ……。」「
「適当にうそをついてごまかす

「なるほど、記憶喪失か……。ならしかたがないな。IDを作るう。」

「ありがとうございます、それでは失礼します。」

一礼をして退室しようとする、呼び止められた。

「待て、君はこの国を世界を我々と一緒に救わないかね？超能力がなくてもその能力があればヒーローになれるかもしれんぞ？」

「国も世界も救うのはもう飽きましたので・・・。では」

この言葉に顔をしかめられたが無視して部屋を出る。

なぜ拒否したか？それはレオンにこの世界を救う動機がないためだ。平和のため？世界のため？民衆のため？そんなことでレオンは世界を救いたいとは思わなかった。前いた世界でもそうだ。世界のためというよりは仲間のために戦った。仲間を失いたくないから彼は見ず知らずのそれこそ見えない誰かのために何かするということとは自らしない。あくまでも、自らが巻き込まれたり、見える範囲でやるべきことをやる。そういうスタイルだ。

出入り口で身分証明書（ID）を職員から受け取るとさっさと機関を後にした。

施設を出て数分後

尾行されている、そんな感じがする。

十中八九クレイモアセブンの連中だな、巻くか。それとも

そう考えつつ次の角を曲がる。

尾行者も同じように角を曲がったが、いない。

見失ったか、そう思いふところから携帯を取り出し本部に連絡をとろうとして

背後からの一撃で意識を失った。

やはり、クレイモアセブンのエージェントか。
気絶している尾行者のポケットを漁りながら思う。

サイフはもらっておこう、人を勝手に尾行した罰金だ。

尾行者をそのへんのゴミいれに隠して、立ち去ろうとしたとき人の
気配に気づいた。
囲まれている！

「パチパチ」

「なかなかの使い手だね、初めまして。私は超能研究機関ブックメ
ーカーのTだ。君をスカウトしたい」

いきなり拍手をした男が唐突に名乗った。

「またか……」

「また？ああ、クレイモアセブンの連中ことだね。彼らと私たちは
敵対関係にあってね、彼らのところであぶれた物を我々が回収して
るところなのさ。」

「物……？人を何だと思ってやがる」

「これは失敬した。しかし、超能力が使えない者は人、では使える
者は一体何になると？」

「人だろう」

「違うね、超能力を使える者は所詮その分野でしか活躍できない、つまり、物、なんだよ」

「馬鹿の発想だな」

話を強引に切り上げてその場を離れようとする

周囲から殺気が来た。

「逃がさないよ、強引にでも連れていくからね」
そういうとTが襲い掛かってきた。

（まいったな、このせまい路地で使える魔法は少ない。あとは敵になるべく見せないようにしないとイケないし。めんどいなー）
攻撃をかわしながらそう考える。

「まずは、取り巻きをなんとかする！」

壁を蹴り、囲いの外に出て着地したと同時に取り巻きの一人の背後から貫き手で倒す。

「全部で4人か。いや、今ので3人かな」

背後に立たれたことに気づき慌てて体勢を立て直そうとしていた一人を手刀で首を切って倒す。

反撃しようとしている一人の間合いを一瞬で詰め正面から胸を貫き倒す。

その隣にいた一人の首を落とす。

「お前で最後だ。」

一瞬で連れてきた4人を倒されその戦闘力の高さにはTは驚愕した。

(こいつはヤバイ)

自ら戦闘を仕掛けた自分に後悔をしたが、それまでだった。気づいたときには頭を掴まれ視界が真っ黒になった。

「チツ、たいした情報を持っていないな。」

Tをその辺に投げ捨てる。

ろくな情報を持っていなかったが一つだけひっかかる物があった。

『X地区』

Tの記憶深層にあった単語。

(気になるな、行ってみよう)

好奇心に導かれレオンはX地区に向かった。

機関と機関と（後書き）

ここまでほぼ一氣に書いてきましたが、疑問、修正点などありません。たらごと指摘のほどお願いします。

救世主（前書き）

今更舞台設定その1：世界規模に渡る超能力者の出現。超能力者発生の当初、政府はこれを否定。またその後次々と現れる能力者たちを曖昧な表現と説明をしてきたため一般の認識で超能力者は、'化物'、という扱いで収まってしまった。そのため超能力者を持っていくとわかれば自分の子、子供、友人、仕事仲間等々忌み嫌い差別される存在である。これに異議を唱える人は少なく超能力者排除運動が活発化している。これに反し政府や国の機関、軍など超能力者を優秀な人材として扱うというひどい状況に陥っている。

救世主

X地区

そこは一般的にはスラム街と認識されアメリカ合衆国一犯罪率が高く、危険な地区だと思われるが実際のところそう思わされているだけである。なぜなら、そこには

(うーむ、ここはどこが特別なんだ?)

X地区に着いた早々の感想を思いながらレオンは歩く。特になんの変哲もないただのスラム街だ。寂れた商店、ひび割れた道路、暗い顔の住人。

そして地区に入ってからずっと見られているような視線。

(またか・・・)

正直うんざりするが問題が一つあった。

相手の位置がわからない。今まではなんとなく視線が発せられるところを気配で推測していたがこれはどうやらだいぶ遠くから視られてるらしい。

(気配を捉えられないということは・・・昨日作ったやつを試してみるか)

目を瞑り周囲をイメージする。

レオンから微弱な魔力の波が円状になって周りに広がっていく。

『サーチ』

こちらの世界に来て初めて作った周囲探索魔法。周囲の建物や人、地形などを一定範囲まで把握することができる魔法だ。波を断続的に出すことで敵の位置を常に把握できるリーダーのようなことも可能だがその場合常に自分は固定の位置にいないといけないため実戦ではあまり役に立たない。

(この場合自分を視認できる場所かつ動いてないやつが対象だな)

その根拠は曲がり角を曲がったにもかかわらず視線が外れなかったからだ。

後ろから尾行しているのであれば曲がった時点で視線が一時的に外れるはずだからだ。

しかし、サーチ魔法を使っても対象者がいないことにレオンは驚いた。

(どういうことだ?)

視線は強くなる一方だが見つからないものはしかたがない、諦めて歩き続ける、が

(む?)

行き止まりだ。そして周囲に複数の気配、やられたな。

「何者だ、てめえ」

赤髪で体育会系の男が前に出てきた。

「観光客さ、珍しいものを見に来た。」

軽くレオンが答える。

「かんこうきやくう？ふざけるな！」

ゴウツ！熱気が男からでた。

(これは・・・)

「てめえが何者かはしらねえが、炭になりやがれえ！」

男の手が突然燃え上がり炎を纏った拳が迫ってくる。

これをなんなくよけるが、レオンはこのとき妙な違和感を感じた。

「そこまで！」

いきなり声が聞こえたと思うと赤髪の男の動きがピタツと止まった。

「チツ、なんだよ。邪魔するな」

暗闇から黒髪の少女が出てきた。どうやらさっきの声の主はこいつらしい。

「ジーク、やめなさい。ミンがあなたをお呼びよ、そのあなた付いてきなさい。」

「え？ちよ????？」

今まで張り詰めていた空気が急に変わる。戸惑いながら少女に付いて行くが頭の上でははてなマークが乱立している。

よくわからないまま少女に導かれ、よくわからないまま地下室に入り、よくわからないままなんか車椅子に座っている金髪少女とご対面している。

「待っていました」

「はぁ……。」

「あなたの来ることはだいぶ前から視ていました」

「そうつすか……」

「やっと……やっと会えました！」

少女が涙ぐんでいる

「え、えーと……？」

「あなたこそが救世主様です！」

「は？え？」

それから一時間ほど涙ぐむ車椅子少女のミンから「私たちをお救いください！」とか「あなたが来ることは私の夢でした」とかその他諸々言われた。

だが、正直救世主らしきことを何もしていないレオンに「救世主様」とか言われても戸惑いしかない。なぜこの少女は俺なんかに期待するのだろうか。

救世主とか呼ぶのだからなんかしらの事情があるのだろうかと予想して色々と聞くことにしたのだが、話を聞いているうちに「なるほど

なあ〜」から沈黙へと表情が変わっていく内容だった。彼女らが話すとある事情とはつまりこうである。

このX地区とは簡単に言うと超能力者達の町である。元々はアメリカ一犯罪発生率が高い地区であり三つのギャングが常に抗争をしている地区でもあった。ある日排斥運動などで他の都市から追い立てられた超能力者がこの地区に流れ着いた。長年この地区の住人は度重なる抗争で疲れ果てており超能力を使おうがあまり関心を持たなかった。そのため非常に住みやすい街だったのだ。しかし、抗争の激化は超能力者たちにも飛び火してきたため当時のリーダーは3つのギャングの撲滅させることでこの地区の安定化を図った。当時最強メンバーの手によりギャングの撲滅は非常に容易かった。地区には活気がふたたび戻り新たな街としてスタートした。各地から同じような境遇の仲間も増え家族や友人が増えていった。だが、問題はここからだ。超能力者達が一箇所に集結し始めている。これを一般人が快く思うはずがない。恐怖が狂気に暴力に弾圧に向かっていく。あいつらがいつぱい集まって何かするに違いない。戦争か、虐殺か、憶測が憶測を呼び次第に大事になっていく。そしてある日事件が起きた。とある超能力者排斥派の議員が自分の票数欲しさについてしまったのだ。「私がよりよいポストに就いた暁にはあの地区は抹消する」と。もちろん、世論は排除運動が過熱を高めている、そして議員を応援してしまう。あとはもう時間の問題だった。地区はいまや緊張が極限まで高まりつつあるのだ。

「少し考えさせてくれ」

そう言うとレオンはその場所から抜けた。ミンは悲しそうな目をしてたが……。

レオンは悩んでいた。異世界に飛ばされて、自由奔放に、気ままに行動していたがここに来てまさか自分に救いを求めてくるとは正直思ってもいなかった。

一日中空を見つめ悩んだ結果、彼は結論を出した。

「俺がお前らを救うものとして具体的に何を求める？お前たちは何が欲しい？」
彼らに問う。

「私たちは・・・居場所が欲しいです。静かに平和に暮らす場所が！」

「・・・わかった」
(あの時と同じだな、あいつらも自分たちの居場所を求めているな・・・)

決心は固まった。

「いいだろう！お前たちを導こう、そして必ず救い出すと約束しよう！」

「ありがとう・・・」

「でも、あなた何か考えがあるの？」
黒髪が言う。

「一応な。居場所がほしいのだろう？ならば作ればいい、その作る場所もアテがある。大丈夫だ。
あとは、輸送の手段なんだが・・・」

簡単に説明すると黒髪はすぐに仲間を呼びに行った。

「他のメンバーを集めるわ！」

急遽集まった各メンバー代表たちは計画に驚きを示したがミンが賛同していると知り、素直に従ってくれた。彼らと細かい打ち合わせをしていく。

「こんな感じかな、あとは決行の日にちだが・・・」

ズウウウン

突如衝撃がきた。

「どうやらすぐにも決行したほうがよさそうだな」

「え？」

ミン達は状況を把握できてないようだ。

「お前たちは今の計画をそのまま実行に移せ！いいな！」

「でも・・・！」

「そんなすぐには・・・。」

「いいからやれ！ここで死ぬぞ！」

さらに衝撃がくる。

「一体何がおきて・・・」

「敵襲だ、おそろくな」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8534z/>

異世界からの勇者サマ？

2012年1月10日00時48分発行